

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第135号 2026年3月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 富岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 蔵書活用の可能性	富岡 勝	2
ある山口高等学校卒業生の思い出 － 昭和九年度卒業文甲会雑誌・『九甲』創刊号から －	谷本 宗生	7
女子教育史散策・昭和戦時下編(84) フェリス女学院の場合3	長本 裕子	10
進学案内書にみる戦前期東京の予備校(23): 『最新東京学校案内』(大正10年)(2)	吉野 剛弘	19
刊行要項(2026年2月15日現在)		23
短評・文献紹介 ライトノベル『ダンジョンに会いを求めるのは 間違っているだろうか』14巻について(谷本宗生)、西岡壱誠 『「伝える力」と「地頭力」がいきいきと高まる 東大作文』について (富岡勝)		24
会員消息 谷本宗生、山本剛、田中智子、富岡勝		25

コラム

“蔵書活用”の可能性

とみおか まさる
富岡 勝

(近畿大学)

「神辺文庫」準備作業への参加

最近、蔵書についての作業に参加することがたまたま続いた。

2026年2月20日と3月11日におこなわれた「神辺文庫」準備作業に、有志の一人として参加した。本ニ

ューズレター同人の神辺靖光さんの蔵書(段ボール箱150箱以上)をいくつかの大学の研究室などに移動して公開しようという構想の一環として、150箱以上の段ボールを車で移動する作業の第一弾だった。神辺さんの蔵書は、自治体教育史や、史料集、教育史関係全集など、日本教育史を研究する上での基本文献が長い年月をかけて数多く集められた貴重なもので、今後、幅広い世代の研究者を大いに支えてくれると思う。今後、整理や、諸条件が整って本ニュースレターでも詳細を報告できる日が到来することを願っている。

京大吉田寮「茶室」蔵書移動作業への参加

また3月には京大吉田寮「茶室」の蔵書の移動作業に数回参加した。吉田寮「茶室」蔵書とは、京都帝国大学寄宿舍時代の「大正期・昭和初期の本が、寮の共有スペースの「茶室」(昔は、ここで本当にお茶が点てられていたらしい)に保存されている蔵書である。約100年前の学生たちが読んでいた本をまとめて目にすることができる場として、また、現在では入手困難な図書を閲覧する場としても貴重である。

この「茶室」蔵書については、静岡大学雄萌寮出身の猪瀬貴大さん(本ニュースレター46号にコラム「静岡大学雄萌寮図書室の蔵書目録作成を終えて」、89号にコラム「静岡大学雄萌寮の閉寮決定を受けて」を寄稿)作成の詳細な目録が吉田寮自治会のWebサイトで公開されている。

<https://www.yoshidaryo.org/archives/uncategorized/media/373>

[9/](#)

今回の移動作業は 1913 年建造の吉田寮現棟の耐震補修のための一時退去にともなうものである(といっても京都大学は補修計画を未公表で、吉田寮の歴史を尊重した補修になるかどうか、注目が必要だろう)。蔵書を含む現棟の共有スペースの備品や物品は 2015 年建築の新棟に一時保存されたが、スペースが不足するなか、古い蔵書を廃棄せずに保存することを決めた現寮生に敬意を表するとともに、この蔵書が今後も新しい世代の寮生に活用され続けていくことを期待したい。

本の重要性に改めて気づく

こうした作業に参加するなかで、図書の有用性、蔵書の価値について改めて気づいた。これまで、ともすれば取り組んでいるテーマについての新史料の探索に関心が集中し、図書の有用性をそれほど重視してこなかったこと、そして蔵書の構築や活用をあまりしてこなかったことを反省する。

コピーなどで収集した史料は、ともすれば数年後には自室内で散逸してしまうが、本は、数十年は余裕で残る。先日、研究室の書棚を眺めたら、約 40 年前から「積ん読」していた『小原國芳自伝(1)』『小原國芳自伝(2)』に気がつき、ぱらぱらめくったところ、新教育に関係した人物の人的交流について詳細に記されていることに気がつき、非常に興味深かった。本には、こうした数十年以上を経ての出会い直しの可能性がある。

また、書評というのも、研究を深めるきっかけになる。『図書新聞』(惜しくも今年3月末に終刊)の 2026 年 1 月 24 日号に掲載された石岡学著『一〇〇年前の「入試改革」』(勁草書房、2025年)の書評を担当する機会にめぐまれたことは、貴重であった。また、田中智子会員の『占領下の学生自治会と学生運動会』(六花出版、2025年)についての大学史研究会の書評会(5月17日、東大駒場キャンパス < <https://daigakushi.jp/home/gyoji/> >)でコメントを担当することも深く学べる貴重な機会として、大変楽しみだ。

蔵書の価値

そして、本の重要性とともに、本が数多く集められた蔵書も大きな価値があることに気がついた。蔵書は、さまざまな本にまとめて接する機会を提供するだけでなく、蔵書のある空間は、人を結ぶ役割もあるのではないかと。蔵書のある空間で研究会、ワークショップ、交流会などを開催するのは、蔵書と会合のテーマが結びついてとても良いのではないかと。本ニューズレターの研究交流会は、これまで何度も神辺邸でおこなってきたが、自治体教育史などの蔵書を眺めながらの研究交流会は、大変盛り上がった。

まちライブラリー

そんなことを考えているうちに、あるきっかけで、京都市左京区内の築百年の長屋を活用した「吉田コミュニカフェいきな」というスペースを訪問した。

吉田コミュニカフェいきな についての記事

<https://machi-library.org/where/detail/9557/>

<https://www.instagram.com/yoshida.ikina/>

そこには京都についての本が多く集められ、「まちライブラリー@いきな」も運営されている。本を読みに行くこともできるし、月末のジャズライブを含む地域イベントに参加することもできる。なるほど、そうしたスペースと蔵書は相性が良さそうだ。

「まちライブラリー」という言葉はこれまで少しは聞いたことがあったが、改めて調べたところ、次のような、全国各地で始まっている蔵書を使った自主的な活用であることが分かった。

まちライブラリーは、いつでも誰でもどこでも始めることができる、「本」を通じて「人」と出会うまちの図書館です。個人や団体が、自宅や店舗、病院、学校などの一角に本棚を設置して本の貸し借りなどを行う場として全国に広がり、今では

図書館や公共施設、商業施設、サービス付き高齢者住宅などにも広がっています。多様な人たちがそれぞれの想いをもって展開する活動になっています。

(まちライブラリーのWebサイトより)

<https://machi-library.org/what/>)

富岡研究室の蔵書活用は？

職場である近畿大学の富岡研究室には、私が「これから読んでみたい」と思って集めた本を手当たり次第、詰め込んでいる。したがって、決して質の高い蔵書とはいえないが、シェアしながら活用することを考えてもよいのではないかと気がついた。

いくつかの「まちライブラリー」を訪問して話を聞いて、何かできることがあったら協力していきたい。

なお、すでに、関西教育学会ホームページに設けられた「学校資料の紹介」コーナーに、富岡研究室に置いている史料のことを少し紹介している。

関西地方を中心とした学校等に所蔵されている「学校資料」の紹介

<https://kansai-edu.jp/document/overview/>

この発想を広げるのであれば、研究室の書棚についても何らかの形で公開して興味がある人には見に来てもらっても良いかもしれない。

蔵書の可能性や活用方法について、事例やアイデアなどをぜひ寄せていただきたい。

付録として、未整理な状態で恐縮だが、次ページに富岡研究室の蔵書風景の写真を貼ってみたい。



富岡研究室の蔵書風景

ある山口高等学校卒業生の思い出

— 昭和九年度卒業文甲会雑誌・『九甲』創刊号から —

たにもと むねお
谷本 宗生(大東文化大学)

このたびネット古書店(ロードス書房:神戸市)から入手した、山口高等学校昭和九年度卒業文甲会雑誌・『九甲』創刊号(帝大プリント連盟印刷部、1937年刊行か)から、山口高等学校文甲卒業生で、東京帝国大学法学部に入学した有田毅(兵庫出身)が記している、高校時代の「思い出」を紹介してみたいと思う。

報告的に「思ひ出づるまゝ」 有田 毅

序 詞

正月も恙がなく遊び了へて、再び本郷街に舞ひ戻つて来た。昨年より大分暖くて暮しよいが、それでも此処に暮すことは寒々とした感じがする。さて我々高等学校で同級の者は、大体今春を学窓の最後として学士に巣立つ筈であり、従つて何がしの所懐を相互に開陳することは、意義もあり、親睦的でもある。この趣旨に賛意して思ひつくまゝに述べることにする。

大体追憶が快く心にとやたふ、為めには、第一に可成りの年月を隔てることが必要であり、第二に本当にさう感じた経験が大切である。僕はまだ卒業しないのだから大学のことについては高等学校の頃のことの方が良い憶ひ出なのである。…略…

中学卒業の頃

山口は全く静かな土地であつた。僕にとつては若い中の三年間をあの様な所で暮すことは良いことであると思ふ。神戸の中学校を卒業する際、他の級友達にする様に、僕も二三の高等学校に願書を出した。いろいろの事情が重つて思ひ

掛けず選択に迷ひ、期日の間に山口を決定した。中学生のあの頃、何う云ふ心境の経路を通つたか知りたくて日記を引張り出してみたが、その一、二箇月がブランクであり、一日の中に静かな気分で考へる数分間すらない様な苛立たしい生活をして居たものらしい。唯、記憶にあるのは、僕の兄及び庭球部のT氏の在学のため、気分が向いたらしいことである。若し僕が他の高等学校に行つてたら、同級の諸兄とは永久に不知であつたらうことは云ふ迄もない。

山口への親しみ

山口へ来ることは何んだか島流しに会つた様な気がして淋しくもあり嫌でもあつた。あの土地に親しみを持ち得る様になつたのは大分遅くだつたと思ふ。同級の友人中、最初に見知つたのは小倉君であつて、丁度、校門辺の八重桜が文字通り爛漫と美しい夕暮、威勢のよい挨拶に出遭ひ大変嬉しく思つたのが抑々今に至る浅からぬ縁の始りだつた。

寮の一年間は、何分家庭外に生活する初めての経験だつたので、いろいろのことに会つて実に当惑し、難渋し喫驚した。瓦斯暖炉で珈琲を湧す智慧と余裕が出るまでに少なからざる月日が経過した。僕の在寮中の多少の事柄に関し、願はくば木村、有馬等の諸兄よ！余り憶ひ出さないで忘れて呉れ給へ。

残念に思ふこと

山口での三年間は、独立に生活すること及び伝統と権威より自己独立することの習得が収穫であつた筈だ。気随意的な生活が許されて感情は豊かに育まれただらう。庭球部で管兄等と行動を共にしたことどもは永久に快い憶ひ出となる。尤もスポーツに無心になる許りでなく、も少し[ママ]勉強したら良かったと残念に思はぬでもない。

高等学校時代を省る随筆などで全く屢々、文化的教養に専心し煩悶し懊悩した体験の叙述に遭遇する。既に有名の思想家、未だ無名の少壮学徒の、斯かる

経験談に接する毎に、僕は自分に思ひ合はせてつくづく嫌厭を感じ、憶!失敗つたことをしたと劇しい感情に襲はれ居堪れなくなるのである。

友達

我々高等学校の級友は、仮令数月数年別れていて再会しても、たつた五分間以前の様に應對することが出来る。これがなんとしても有難いことだと思はずには居られない。僕等にはいろいろの友人があり得る。先づ、小学校の友、所謂竹馬の友は懐かしいであらう。次に、中学の友、之は僕には割合多い。皆コースを大体同じくしているので気分は合っているが、普通なら矢張り、偶然的な地域的な環境の因子に繋るだけに、何か残るものを感じずだらう。更に、他の機会に知人となる場合もある。勿論、友人には夫々の格別な味のあるものであり、親疎輕侮に応じ様々なニュアンスがあることは云ふを俟たない。然し気安さといふか、心置きのないのは高等学校の同輩である様に思ふ。…略…

なお同誌巻末の「編集後記」(編集者:斎藤毅)では、この種の企画編集について、「ぼくたちの上の二つのクラスは在学中から始めました。けれども僕たち[ママ]は、皆が、学校を巣立つて散り散りにならうとする日から始めます。なぜなら友情の結成は、ぼくたちが別れようとする日に、最も強く必要になると考へるからです」と述べている。そして、正直な思いとして、「何んだか子供らしい感傷にすぎぬかも知れ」ないとしながらも、「かうして集めて読んでみますと、また心優しいことがあることも否定出来ません」と吐露している。それが、素直な思いなのであろうと思う。

女子教育史散策・昭和戦時下編(84)

フェリス女学院の場合3

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

『ニューズレター』第134号に続き、フェリス女学院の戦時下の様子を、『フェリス女学院100年史』『フェリス女学院110年小史』『フェリス女学院百五十年史』を参考に述べよう。

フェリス女学院創立60年のころ

昭和5(1930)年、創立60周年を迎えた。シェーファー校長と有吉忠一横浜市長が活躍した大正末期から昭和初期の横浜は、国際交流が盛んであった。特に米国との交流は開国開港以来深く、横浜市が主体となってさまざまな日米親善交流が行われた。その一つ、昭和4(1929)年5月30日、フェリス女学院のカイパー記念講堂で、日米協会が主催して、駐日米国大使や各国総領事、神奈川県知事ほか在留アメリカ人300人を来賓として、山手の外国人墓地に埋葬されたアメリカ人の慰霊祭が開催された。この頃のフェリスは国際港都横浜のシンボリック的存在でもあった。昭和6(1931)年1月31日の『横浜貿易新報』は、「…山手高台にお城の如くそり立つ愛と自由の学びや、どこまでも新鮮澆刺、光に充ち望み溢れ国際都市横浜が持つ気品と誇りを反映するかに文化の潮に棹さして行く和英フェリス、…」⁽¹⁾のように、報じている。また、生徒は横浜のモダンガールの象徴として、写真報道誌にその姿が紹介されたり、建物や校庭は港町横浜を舞台にした映画の撮影にしばしば使用されたりした。

昭和5年、学則が改正された。本科を中等部と改めて5年間に短縮し、その上に1年の家政科コースと、2年の英文科コースを設置し、高等部とした。昭和14(1939)年には、家政科の修業年限も2ケ年にそろえ、中等部5年、高等部(英

文科、家政科)2年の体制が終戦時まで続いた。そして、この高等部が戦後の専門学校、短期大学の母体となるのである。

満州事変勃発の影響

昭和6(1931)年夏、中国の湖北・湖南・江西・安徽・江蘇など16省に及ぶ地域で大規模な洪水があり、罹災者1千万人にのぼる被害が発生した。日本の実業界では渋沢栄一を中心に、中華民国水災同情会が結成され、義援金募集に乗り出した。同年9月15日、フェリスにも中国基督教連盟から日本基督教連盟を通じて10月末までに生徒・父母・同窓会に献金を求める要請があった。

ところが、こうした動きの中で、同年9月18日、満州事変が勃発した。水害のための義援金を届けに上海を訪問した日本代表に対し、中国政府は受け取りを拒否した。民間の親善交流は軍の暴走によって霧消してしまった。時の若槻礼次郎内閣は不拡大方針を声明したが、軍は独断介入を強め、新聞・ラジオは連日戦況を報道し、国民の戦争支持熱が高まってしまった。横浜では、市連合青年団が、市内各区の男女青年団・少年団・在郷軍人会のほか、フェリスを含む諸学校に「愛国運動に関する件」を通知した。同年11月22日、大会を開催し、国威発揚をはかる行進が行われ、11月末までに小学生・児童9万人から4,500円の拠金とお菓子などが入った慰問袋2万個あまりが横浜貿易新報社に集められた。横浜市会は同年12月2日、関東軍司令部へ激励と慰問の電報発信を可決した。フェリスの職員生徒もこれに呼応し、翌3日、73円34銭を「満州駐屯軍慰問金」として新聞社に送った。このように中国への水害救援が出征兵士の慰問へと大きく変転した。

戦時下、社団法人から財団法人へ

昭和12(1937)年7月、日中戦争に突入り、戦時体制に入ってしまった。日本主義が異常に高まり、キリスト教系の学校は有形無形の圧力を受けるようになっていた。そこで昭和14(1939)年5月、ミッションの直接経営による社団から、日

本人半分を含む理事会が経営する財団法人へ切り替えられた。日米関係が緊迫する状況下、日本人と日本の法律の監督する財団法人になるように、当局からの指導があったのである。

財団法人寄付行為は、学校の目的として、「教育勅語ノ御趣旨ニ基キ基督教主義ニ依リ女子ニ教育ヲ施ス」ことと述べ、教育勅語がキリスト教より優位におかれている。ステゲマン校長は、昭和15(1940)年9月、「日本に建てられた学校は、日本人によって教育指導さるべき」として、辞表を提出した。当時の状況で米国人校長がその地位にとどまることはもはや困難であった。そして、都留仙次がフェリス学院最初の日本人校長に就任した。フェリス創立70周年、皇紀2,600年といわれた年、米国人校長の時代が終わった。

校名変更と宣教師帰国

次第に戦時協力をせざるをえなくなり、国旗掲揚、宮城遙拝、勤労奉仕、横浜市の銃後奉仕会より委託された慰問袋の製作、土曜日の勤労作業、特設防護団設置、防空演習・防空訓練などが行われるようになった。英語が敵性語とされ、「フェリス」という米国人名は適切ではないとして、県当局から変更を指示された。昭和16(1941)年3月、学校の所在地名を冠して「横浜山手女学院」と校名変更した。

同月、婦人宣教師たちは、交換船で横浜から帰国した。その3ヶ月後に外国人資産凍結令が発令された。ミッション本部より大分市にあったミッション所有の土地を無償譲渡された。宣教師、米国人所有の二、三の土地家屋を譲り受けた。同年11月には当局の指示で寄付行為を変更し、財団法人からもミッション関係者を削除した。

金属供出

昭和16年4月、生徒の自治活動である学友会は報国団に改編され、学園の戦時態勢が整えられた。従来の各部のほかに訓練部と国防部が増加された。訓

練部は、修養班・勤労班・救護班、国防部は、防空班・銃後奉公班などであった。同年11月3日の明治節に御真影を奉戴した。以後、教職員が学校に当直して御真影を奉護しなければならなくなった。

昭和17(1942)年8月12日に公布された「金属類回収令」(勅令第667号)によって、鉄、銅を供出することになった。鉄は、校地周囲の柵5トン、門扉4ヶ所1トン、階段等の手すり1トン、溝蓋、マンホール1トンなど。銅製品として、階段の手すり、講堂のシャンデリア、門灯、扉の引手、押手、花器、什器などを打ちつぶして供出。昭和19(1944)年には、さらに暖房設備、校内記念板、ネームプレート等一切を供出した。昭和18(1943)年2月発行の同窓会誌『白菊』の扉に、カイパー講堂のシャンデリアの絵とともに、下記のような言葉が記されている。

学びやの光となりて 講堂の小暗き所に輝きし シャンデリア征けり、一片の
金具なりとも おのがじし祖国の為に 弾丸に魚雷になりて 仇の国撃滅せ
んと シャデリア征けり⁽²⁾

一つひとつの詩句や「シャンデリア征けり」のリフレインに、戦争へと突入していく時代への静かな抵抗が込められているように感じられる。

勤労働員と教育臨時措置

生徒の軍需工場への動員は、太平洋戦争開戦直前の「国民勤労報告協力令」(昭和16年11月22日公布、勅令第995号)によって義務づけられた。フェリスでは昭和17(1942)年4月末から中等部4年以上、のちには3年、さらには2年以上の生徒が以下のような工場へ勤労働員された。上級生は軍需工場へ、下級生は森永製菓などの軍用食料製造関係に動員された。

動員期間	動員先	人数	動員学年	作業内容
1942.4.30 ~ 5.4	横須賀市田浦 横須賀海軍工廠	100名	中等部4.5年、 高等部2年	機銃弾薬包装その他
1942.11.21 ~ 11.25	東京陸軍兵器 補給廠田奈部隊	50名	中等部4.5年	兵器取扱
1943.2.11 ~ 2.15	同上	150名	同上	弾丸の手入れ
1943.6.22 ~ 6.26	同上	同上	同上	同上
1943.8.10 ~ 8.14	同上	181名	中等部3~5年	同上
1943.10.12 ~ 10.17	古河電気工業 横浜電線製造所	100名	同上	電線被装 整理
1944.1.16 ~ 1.31	森永製菓株式 会社 鶴見工場	同上	同上	乾パン包装材料製作
1944.2.16 ~ 2.29	森永食糧工業株 式会社 鶴見工場	145名	中等部1~3年	チョコレート部、ビス ケット部、キャンディ 部、箱製作部
1944.3.11 ~ 3.20	同上	140名	同上	同上
1944.3.12 ~ 3.21		100名	中等部3~5年	弾丸の手入れ
1944.4.1 ~ 4.16	東京陸軍兵器 補給廠田奈部隊		中等部4~5年	
1944.5.20 ~ 11.20	森永食糧工業株 式会社 鶴見工場	100名	中等部2~5年	乾パン包装材料製作、乾パン製造
同上	池貝鉄工所発動 機製作所 神明工場			手仕上げ作業及訓練 後小型機械加工 作業
1944.6.28 ~ 12.27	東京無線電機株 式会社 器材工場	100名		現場作業
1944.6.1~当分 の間	住友通信工業 玉川向製作所	100名		電波兵器製作作業
1944.8.21	帝国通信工業			
1945.3.24~6.	不二屋電機工場			
1945.4.2 ~ 8.14	文寿堂		中等部3年	海軍暗号文書確認 作業
1945.4.1 ~ 8.16	帝国通信工業			
1945.4.1 ~ 5.26	住友通信工業 玉川向製作所	100名		電波兵器製作作業

(上記の表は、『フェリス女学院百五十年史』上巻426~430頁を参考にして作成。)

平成24(2012)年に歴史資料館がフェリスの同窓会の協力を得て、昭和19(1944)～26(1951)年の卒業生に行ったアンケートの記述により、当時の生徒たちが勤労働員についてどのように感じていたか述べよう。

東京陸軍兵器補給廠田奈部隊に動員された元生徒(迫貞子)は「兵隊さんが大勢居て、工員と一緒に砲弾作りの作業をしました。緊張しました」⁽³⁾と述べている。海軍省の管理印刷所に指定された文寿堂に動員された元生徒(坂田落穂)は「真っ赤な表紙の極秘の暗号文書の製品検査をしました。印刷不明瞭や紙のキズ(ローヤレ)や落丁・乱丁を見つける仕事なので、とても神経を遣いました」⁽⁴⁾と述べている。一方、森永製菓へ動員され、特攻隊員や飛行兵の携行食糧として乾パン、ビスケット、飴などを布袋につめる作業をした元生徒(坂田落穂)は「毎週土曜日に10粒入り黄箱の森永キャラメルをくださるのでそれが楽しみでした。お菓子が無いときでしたので家に持ち帰り皆でいただきました」⁽⁵⁾と述べている。また、作業に文句を言う人は誰もいなかったが、セーラー服からヤボな国民服、モンペをはいていくのがいやだったと、思春期の女学生らしい不満を述べている元生徒たちもいた。元生徒(池田久子)の回想によると、「動員中は給料が一ヶ月50円、焼け跡の整理に行った日は特別手当として一日10円支給され、それは帝国銀行の個人口座に貯蓄され、学校の授業料に充当された」⁽⁶⁾そうである。

空襲警報が頻発され、待避が繰り返される中での危険と隣り合わせの作業であった。学校側は生徒の安全を会社に求めるが、防衛課長からは空襲時に「待避命令なくして勝手に待避せぬこと」と生徒への指導を求めたという。

昭和17(1942)年7月、英語の授業時間は1週3時間に制限され、しかも選択科目として、三分の一の生徒しか学べない仕組みになった。この時、多くの公立女学校は英語を全廃した。

昭和18(1943)年1月21日「中等学校令」(勅令第36号)が公布された。「皇国ノ道ニ則リテ高等普通教育又ハ実業教育ヲ施シ国民ノ錬成ヲ為スヲ以テ目的トス」とし、その高等普通教育を中学校と高等女学校とが、実業教育を実業

学校がそれぞれ行うとした。中等学校の修業年限は4年とし、土地の状況により高等女学校では2年、実業学校では男子3年・女子2年とすることができるとした。同令は18年4月1日より施行され、「中学校令」「高等女学校令」「実業学校令」は廃止された。

昭和19(1944)年2月16日「国民学校令等戦時特例」(勅令第80号)が公布され、第四条第1項「昭和十九年度ニ於テ中等学校令第二十条ノ規定ニ依ル中等学校ノ第三学年及第四学年ニ在学スル生徒(文部大臣ノ定ムル者ヲ除ク)ニ付テハ其ノ修業年限ハ同条ノ規定ニ拘ラズ同令第七条又ハ第九条ノ規定ニ依ル」によって、修業年限が5年の学校に入学したはずの4年生と3年生の生徒の修業年限が4年となり、昭和19(1944)年度(45年3月)に本来の卒業生である5年生と繰上げ卒業の4年生が同時に卒業した。専門学校入学者検定規程による指定学校(各種学校)であったフェリスも中等学校の修業年限の臨時短縮に応じて、昭和20(1945)年3月、4・5年生を同時に卒業させた。

昭和19年3月、高等部は新規募集をせず、在学中の者も、生産などにふりむけるため修了証書をもって勉学を打ち切り、高等部を閉鎖した。

戦争末期

昭和19年2月、政府は「決戦非常措置要綱」を決定し、4月、「学校校舎転用に関する具体的実施要綱」によって、学校の校舎は軍需工場、軍用倉庫、病院などに転用できることになった。同年9月、海軍の特設横浜港湾警備隊の大部隊が山下町の横浜生糸検査所内に置かれた。フェリスは兵舎として接收され、その桜部隊兵員441名が敗戦まで駐屯した。校内に機関銃や高射砲などの兵器が配備された。部隊配備に先立って同年8月11日までに仮校舎への移転を完了させた。

寄宿舍(鍊成寮、18年3月閉鎖)を仮校舎として教場に転用した。二部屋を打ち抜いて畳敷きのまま寺子屋式に座って授業を行った。しかし、毎朝の礼拝は食堂で全員起立して守られ、この時、必ず都留校長は祈りの最後に「『今日も味

方の兵士の上にお恵みを、それと同時に敵の兵士の上にも』と祈り、またある時は『この戦争を一日も早くやめ給え』とすら祈った」⁽⁷⁾という。また、同年12月22日には、警戒警報発令の中でクリスマス礼拝を行った。当局から授業を日曜に行うよう指示された時も、フェリスはこれを実施しなかった。聖書の授業も続いた。動員中の生徒は、勉強はできなくても動員先で昼休みにささやかな礼拝を守った。

空襲が頻繁になると生徒や教職員に被災者が続出した。地方に疎開する者も増え、生徒数は減少し、教職員の辞任も相次いだ。校長、教務主任はじめ残る教職員にも錬成・動員が行われるようになった。

生徒は工場に出勤して女工と同様に働き、学校にはわずかの教員と1年の生徒が残って勉強を続けたが、空襲警報にさえぎられて、午前中、少々授業ができる程度であった。そして、昭和20(1945)年3月、「決戦教育措置要綱」が閣議決定され、国民学校初等科以外の学校授業は、4月から1年間停止された。

同年5月29日の横浜大空襲で、校舎1棟が罹災し、そこに保管されていた図書、校具、その他ミッション関係、理事会記録など、学校の歴史を語る貴重な資料を、関東大震災について再び失ってしまった。「…失ったものは貴い生命や物的なものばかりではない。永年、信仰において結ばれた海外の友人との友好を失い、生徒らは再び取り戻すことのできない美しい青春と学びの時を失った。…」

(8) このような文章で、『フェリス女学院110年小史』の第七章「暗雲たちこめる」は締めくくられている。

戦後復興

戦後の教育改革によって、学校体系は六・三・三・四制が導入された。フェリスでは、昭和22(1947)年4月、中学部、翌年3月高等学部が認可された。現在のフェリス女学院中学校・高等学校である。従来の高等学校、専門学校の多くは新制大学になったが、フェリスの旧高等部は、旧制の中等学校と高等学校、専門学校の間位置するものであったので、一旦、専門学校(英文科・家政

科・音楽科、2ヶ年修業、22年3月認可)に昇格させ、昭和25(1950)年短期大学に改編された。そして、昭和40(1965)年4月、フェリス女学院大学(英文学科・国文学科)が開学し、現在に至る。

注

- (1) 『フェリス女学院100年史』382頁
- (2) 『フェリス女学院110年小史』102頁
- (3)～(6) 『フェリス女学院百五十年史』428～430頁
- (7) 『フェリス女学院110年小史』103頁
- (8) 『フェリス女学院110年小史』105頁

参考文献

- 『学制百年史』『学制百年史 資料編』文部省
『学制百二十年史』文部省
『フェリス女学院100年史』
『フェリス女学院110年小史』
『フェリス女学院百五十年史』上巻

進学案内書にみる戦前期東京の予備校(23):

『最新東京学校案内』(大正10年)(2)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(慶應義塾大学非常勤講師)

今号は、前号に引き続き武田芳進堂より刊行された『最新東京学校案内』を見ていく。今号では「第十三類 外国語の学校」に掲載されたもののうち、前号で検討できなかった機関の情報を見ていくことにする。

普及英語学校

位置 東京市神田区小川町一番地(電話神田四〇〇八番)

目的 最新式教授法により時代の要求に応ずる英語並に数学を責任を以て最も短期間に完全に専修せしむ

学科 英語 初歩英語 ABCヨリ中学三年程度迄(四ヶ月)

(午前及 中等英語中学三年程度ヨリ卒業迄(四ヶ月)

夜間) 試験英語 中学四、五年及卒業程度(四ヶ月)

数学 中学数学 初歩ヨリ中学四年程度迄(四ヶ月)

(午後) 試験数学 中学四、五年及卒業程度(四ヶ月)

授業料 初歩英語、中等英語、中学数学一ヶ月各一円五十銭、試験英語、試験数学各二元、数学科は教材を無代配布す

日進英語学校

位置 東京市神田区中猿楽町六番地(電話九段二一九七番)

目的 英語数学を教授す

区分 英語部

午前部 初等科(中学一二年程度)

中等科(中学三四年程度)

上級科(中学上級及卒業程度)

受験科(中学五年及卒業程度)

午後部 特設初等科(中学一二年程度)

特設受験科(現二高等予備校等二通学セル学生ノ兼修ニ適ス)

夜間部 入門科(ABC程度)

初等科(中学一二年程度)

中等科(中学三四年程度)

高等科(中学上級及卒業程度)

数学部 高等受験数学科-午後授業(現二中学高等予備校等二通学セル学生ノ兼修【以下紙に覆われて不明】)

修業期 各三ヶ月

学費 入学金一円、授業料三ヶ(マ)間(マ)の分前納、入門科四円、初等科、特設初【以下紙に覆われて不明】銭、中等科、上級科、特設受験科、高等科、高等受験数学科七円、受験【以下紙に覆われて不明】

【紙に覆われて不明】語学校

【紙に覆われて不明】(位置?)仲猿楽町十六(電話九段二一二四番)

学級 初等科、中等科、高等受験科の三種に分ち、各科共毎月初めに新設し三ヶ月を以て卒業せしむ

学費 入学金一円、授業料全納五円

三田英語学校

位置 東京市芝区三田四国町二番地(電話芝四七四〇番)

目的 何人にも必須なる英語数学を短日月間に完全に教授す

学科 英語普通科は午前部と夜間部とありて一ヶ年間に中学全科の英語を授く

英語受験科は午前授業、英語補習科は夜間授業にして、各三ヶ月なり、中学校卒業程度の者に適す

英語高等科は夜学にして中学校卒業程度の英語力ある者を入学せしめ修学年限をニヶ年とす

数学科は夜学にして六ヶ月間に中学全科の数学を授く

入学期 学年は一月、四月、七月、十月に始まる、入学は学年始を原則とすれども欠員あるときは臨時入学するを得

入学資格 満十二年以上の男子

学費 入学金一円、授業料三ヶ月間にて英語高等科は五円五十銭、其の他は各五円なり

校長 田中平太郎

独逸学館

位置 東京市神田区西小川町二丁目九番地

目的 独逸語を教授す

学科 高等受験科、普通(夜学)科、医書科、日曜独逸文法科に分れ、館長龜井藤太郎氏教授す

一部が紙に覆われた状態でデジタル化がされているため不明な箇所がある(マイクロフィッシュを作成した段階でそうになっていたものと思われる)。学校名も覆われているものに関しては、位置情報と記載された他の情報から、「研修英語学校」であると推察される。

今号で取り上げた英語学校の多くは、前号で検討したものより新しく設立されたものである。ただし、普及英語学校と日進英語学校は、正則英語学校の教員だった伊藤豊守と佐川春水がそれぞれ独立して設立したものである(佐川は普及英語学校を経て独立している)。その意味では、新しく設立されたものであることは確かなのだが、分派したという見方も可能である。

三田英語学校は1912(明治45)年に設立されており、設立当初から英語と数学を教授していたが、進学案内書で受験準備教育に対応した機関として掲載

されることがなかった。明治後期に正則英語学校と正則予備学校が芝分校を設置したが、学校の位置を考えると、その後継の学校のように思われる。ただし、この点についてはさらなる検討が必要である。

これらの英語学校系の予備校の最大の特徴は、数学も教授し、その点を目的に掲げている学校が出てきたということである。別に予備校を擁している正則英語学校は別にして、大正前期までは英語学校が他の学科目を提供することは少なく、国民英学会が設置した数理化受験科も短命に終わっていた。学科課程を見る限り、英語関係に比して数学は添え物という感は否めないが、目的に掲げていることの意味は小さくない。これがどのような意味を持つのかは、後の時期の進学案内書の検討とともに明らかにしていきたい。

ドイツ語を教授する独逸学館は出色である。館長として名前の出ている亀井藤太郎は、1917(大正 6)年の『東京府統計書』の各種学校の一覧では、「東京学院」という予備校の校長にその名がある。同校もドイツ語を教授していたが、独逸学館との関係は不明である。

次号は、「第十五類 予備学校」「第十六類 雑種の学校」に掲載された予備校を見ていく。

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項 (2026年2月15日現在)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の典拠を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (著作権の許諾確認) 記事のなかで用いた写真画像などに著作権が生ずる際には、著作元または所蔵先に執筆者が許諾の確認を行ってください。それが大学等の出版刊行物ならば、当該大学の事務部または資料館等の施設に照会し、適切な対応をはかってください。確認がとれたものを用いることとして、確認がむずかしいものについては、写真画像の掲載を差し控える必要があります。
8. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
9. (レイアウト等) 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
10. (web公開) ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
11. (研究交流会) ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
12. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

継続的にアニメ化され人気を博しているライトノベル『ダンジョンに会いを求めるとは間違っているだろうか』(略称:ダンまち)の豊稜・深章厄災篇にあたる第14巻で、深層を迷走するヒロインのリューが、かつて所属していたアストレア・ファミリアの仲間である先輩格なライラとの会話を追想するシーンはたいへん興味深い。ライラいわく「結局、何を『本当』にするかは自分次第なんだ。自分だけが、自分の『本当』を作るんだ。だから色々な話を話半分に聞いて、考えて、自分で納得できる『本当』を作っちゃえ」。さらに続けて「いいか、リオン。知識は武器だ。情報はご馳走。邪道だろうがくだらねー雑学だろうが、学んで覚えたものは全部お前を助ける力になる。だから何でも覚えて、何でも使え」と、「余計な知識はお前を悩ませて時間を奪っちゃうかもしれないが、無知よりマシだ。相当マシだ。それで、時間をかけていいから、知識を『知恵』に変えろ」と強調し、そして「そうすれば、お前は自分以外の誰かを助けられるようになる」と結んだのであった。と現在、いまだ深層で迷走中の主人公のベル・クラネルからリューに対し、「リューさんは…やっぱり、すごいですね」と、「こんな状況なのに、冷静に考えて、正しい選択ができて…僕は助けられてばかりです。リューさんがいなかったら、この『深層』から抜け出すことなんて…」と語られる。リューはいう「クラネルさん、知識を『知恵』に変えなさい」と、「知識が行動に紐付き、応用できるようになれば、貴方はもっと誰かを助けられるようになる。もっと、強い冒険者になれる」と。アストレア・ファミリアの経験が回り巡って、まさに生きているんでしょう。(谷本)

論文をどうやって書いたらよいか、がいつも気になっている私は、近所の古書店で、西岡吉誠『「伝える力」と「地頭力」がいきなり高まる 東大作文』(東洋経済、2019年)を目にしたので購入した。太田あや『東大合格生のノートはどうして美しいのか』(文藝春秋、2008年)など、近年、一般にも役立ちそうな内容が書かれている本のタイトルに「東大」が付けられているケースをよく目にする。おそらく、本を少しでも多く売するために「東大」ブランドが利用されているのだろう。「東大」の使い方として微笑ましい部類だと感じる。

この『東大作文』、なかなか役立った。例えば、次のような記述がある。「実は、読書の極意も作文の極意とまったく同じ。「一方向的であることをやめる」ことによって、扉が開くのです。読書の場合は、「著者が言っていることを一方向的に受け入れるのではなく、自分も能動的になって読む」ことで、文章を正しく読むことができるようになり、地頭を鍛えることができました」(5頁)。つまり、読書も作文も「一方向的であることをやめる」ことが極意だといっているのである。「一方向的であることをやめる」というのは、当たり前のようにも感じるが、このことを、以下のようなコツへとつなげている点が本書の長所だと思われる。

- ・書き始める前に、「最後に何を書くか」を考える」
- ・目指すのは相手を「変化」させる文章
- ・主張の型は必ず1つに決めなければならない（「感情型」「共有型」「要望型」「警鐘型」の4つのうちのどれか）
- ・主張の「型」に合わせて、「目的」「手段」を決める

問題解決に向けて必要なことから分解していく、というのは有力な方法なので、このように、良い文章を書くためのスモールステップを分解して示している点は興味深かった。

実は、本書のヒントを参考にして本号巻頭のコラムの構成を考えてみた。少しだけ書きやすくなった。(富岡)

会員消息

貴族院議員・子爵である水野直(生1879～没1929年)が記した、1917(大正6)年の日記(原本:国立国会図書館憲政資料室蔵、翻刻刊行:尚友倶楽部史料調査室編『水野直日記』2017年所収)を少し拝見しました。この時期の教育史の動向に興味ある私としては、教育調査会から臨時教育会議への移行について、やはり気になりました。大正6年6月13日、「教育調査会改造、従来の会員を変更せざる件に付、三島子岡田文相を訪問。内閣の所属とすることは動かし得ず、元老にも相談せし由」と。翌14日、「三島子午前首相訪問、教育調査会改造の件に付、全員不変更或は不改造の件談判。本日寺内首相より回答あり、調査会の所属を内閣に移すと雖も、現在会員に変更を来さずと云ふ。文部大臣よりも同様三島子爵に回答あり」と、さらに15日、「朝岡田良平大臣として来邸、教育調査会従前の人員を変更せざる件話しあり。…午後…首相より三島子教調は変更せずとの電話あり」と記されています。そして、同年9月15日、「文部大臣岡田良平に対し、臨時教育会議委員承諾の通知を発す」とあります。素朴な記述ですが、関係者の日記として注目すると、やはり興味深い内容だと感じますね。(谷本)

毎年の楽しみである看護専門学校での集中講義を行いました。看護師養成の専門学校も学生募集には苦心しているようです。生き残りをかけて、来年度からはオンライン授業も導入されます。保育士養成校も同じ状況です。戦前の私立大学が志願者確保のために大学予科(2年制)を設置した事例などを思い浮かべます。私学はつらいです…。

(山本剛)

本年3月で神奈川大学資料編纂室の任期が満了し、4月より法政大学大原社会問題研究所に着任しました。

自宅(横浜)の引っ越しはしていないので、通勤時間が徒歩10分から電車・バスで1時間40分に一気に増えました。これまではNHKの朝ドラを観てから出勤していたのが出来なくなってしまいました。幸いにして、電車(JR横浜線)は途中から座って行けることが多いので、スマホでNHK ONEにつないで観ています。通勤時間は長くなりましたが、それを楽しめるような工夫をしていきたいと思います。(田中智子)

コラムにも書きましたが、ここ数ヶ月がとくに「本」が印象に残りました。今年4月から9月初旬までの「研究休暇」を使って、ずっと懸案だった、ある本の原稿を執筆したいです。

(富岡)